

News
letter

噴
火
灣
文
化

[Funkawan Culture]

2018. 3 Vol.12



Date City Institute of Funkawan Culture
伊達市噴火灣文化研究所

■講演要旨

だて歴史文化ミュージアムスタートアップ講演会

【博物館】「ミュージアムと未来をつくるーミュージアムの果たす役割と可能性ー」

国立歴史民俗博物館・館長 久留島 浩……P 3 ~ 5

【教育】「学校教育における『アイヌの学習』の伝え方」

小樽市立高島小学校・教諭 平山 裕人……P 7 ~ 10

■研究ノート

【考古】「噴火で埋まった作物を特定せよ！ー大根の放置実験からわかることー」

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 青野 友哉……P11~12

■発掘速報

【考古】有珠で発見されたチセ(住居)跡の特徴

ー小氷期を生きたアイヌ民族の住居を考えるー

北海道博物館・学芸員 小林 孝二……P13~16

■伊達市の文化財が紹介された本・雑誌・TV番組・展示………P16

表紙

津田 直 「Grassland Tears, Usumoshiri #3」

© Nao Tsuda, Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film



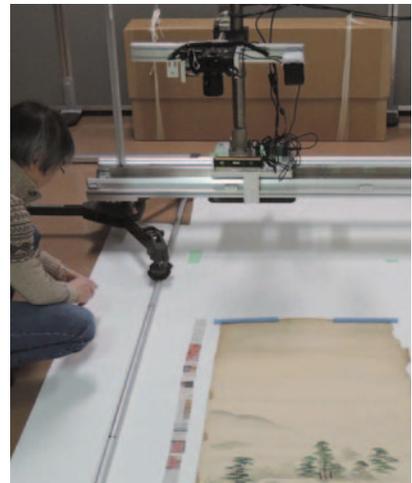
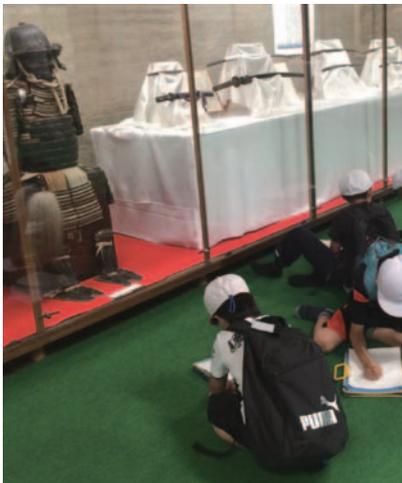
だて歴史文化ミュージアムスタートアップ講演会

講演要旨 【博物館】

平成29年7月9日に、国立歴史民俗博物館の久留島浩館長をお迎えして、「ミュージアムと未来をつくる」をテーマに、ミュージアムの使命とこれからのミュージアムのあり方についてご講演頂きました。ここではその講演内容を一部抜粋して紹介します。

〈講演〉「ミュージアムと未来をつくる」 ーミュージアムの果たす役割と可能性ー

国立歴史民俗博物館・館長 久留島 浩



なぜ、今、ミュージアムが地域社会の中で必要なのでしょうか。結論的に言うと、ミュージアムが持つ、「だれにとっても生涯学習の拠点たりうる」という特色を、「高齢社会」で、人口減少・過疎化が進む地域社会のなかで最大限にかつ持続的に活かすことが重要だと考えています。

現在、日本にはおよそ4500を超えるミュージアムがあり、その種類は多様です。たとえば、歴史民俗系博物館、動物園・水族館、植物園、美術館、科学系博物館などです。これらのミュージアムの設立は、主に1960年代以降に増加し、1980年代にピークを迎えます。経済成長によって文化に目を向ける余裕が生まれたことを背景に、各地でミュージアムがつくられました。「箱物」行政の産物とも言われる、いわゆる「博物館バブル」の時代です。もちろんこの動向は長

続きせず、1990年代以降、経済バブルの崩壊やリーマンショックと連動する日本経済の落ち込みと歩調を合わせる形で「博物館バブル」も崩壊しました。財政難のもとで、「文化」から資金が引き上げられてしまいました。これは、世界的にも同様で、いわゆる「博物館の冬の時代」の到来です。

しかし、このことは、国内ではあまり知られていないのですが、この間、文化活性化のために投資することを後回しにしたこともあって、また海外では、日本について学ぶよりも経済的に発展してきた中国について学ぶという傾向になっていったこともあって、海外のミュージアムでは日本のコレクションを扱うことのできる学芸員が激減し、次第に日本関連コレクションそのものも冷遇されるようになります。わたしの思い込みかもしれませんが、アジアでも経済力を持

つ国の展示スペースが増えているように思われます。

しかし、ミュージアムそのものは今後ますます必要になると考えています。以下、私の勤務する国立歴史民俗博物館(以下、「歴博」と略)を紹介しながら、これからのミュージアムにとって何が必要なのかについてお話します。千葉県佐倉市にある「歴博」は、正式名称「大学共同利用機関法人『人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館』」ということからおわかりのように、「歴史系博物館を持つ大学共同利用機関」という点が特色です。国内外の大学などに属する様々な分野(歴史学・考古学・民俗学など隣接諸学や理科系諸学)の研究者とプロジェクト形式で共同研究を実施し、その成果を展示にして発表しています。また、「国立」では唯一の歴史系博物館で、原始・古代から「現代」まで(1970年代まで)の歴史を展示で示しており、評価することが難しい「現代史」をも展示していると言う点でも特色があります。時代ごとに区切られた6つの総合展示室と2つの企画展示室があり、総合展示室をくまなく見学すると、5キロ近く歩いていただくこととなります。このほか、わたしたちの生産や生活に深く関わってきた植物を栽培するとともに、江戸時代に発展した園芸文化(桜草・変化朝顔・菊・サザンカ)を紹介する「くらしの植物苑」を持っています。

歴博では2007年に、「歴博のめざすもの」を策定し、館のミッションを明確にしました。日本の歴史と文化に関する歴史資料・歴史情報の収集と調査・保存、研究、そして研究成果を展示で公開すること、その

際、資料収集・研究・展示という一連の過程そのものを国内外の学界や社会と広く共有する「博物館型研究統合」という新しい研究方法を構築することで、広義の歴史学を深化させようと考えています。そのために、総合展示を常に成長させ続ける事を、最重視しています。

ところで、ミュージアムとはどのようなものを指すのでしょうか。現在のミュージアムの定義は歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む)し、展示して教育的配慮の下に市民の利用に供し、その教養の形成、自主的な調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関とされています。そして、博物館学研究者の伊藤寿朗さんの整理によれば、ミュージアムは時代に応じてその役目を変えており、その進化は表1のように区分されています。



だて歴史文化ミュージアム スタートアップ講演会

テーマ『ミュージアムと未来をつくる』

講師 国立歴史民俗博物館館長
久留島 浩 先生



ミュージアムは資料を展示するだけの施設ではありません。ミュージアムの基本的な役割から、ミュージアムの未来の姿がどうあるべきか、そしてミュージアムをどう使いこなしていくべきなのか、歴史展示の最先端における国立歴史民俗博物館の久留島館長は、ミュージアムのお話をしてくださいます。きっとミュージアムのおもしろい使い方が見つかるはずですよ。

日時 2017年7月9日(日) 午後1時から午後2時30分
場所 だて歴史の柱カルチャーセンターあけぼの 視聴覚室
無料・申込不要
問い合わせ：伊達市教育委員会生涯学習課文化財係
電話0142-23-3331(514)

スタートアップ講演会のフライヤー



この30年間、世界規模で貧富などの様々な格差が広がり、異なる国・民族・宗教などの間で矛盾・紛争が激化しているうえ、人間を取り巻く自然環境も地球規模で悪化しています。このような時代のなかで、希望をもって未来を構想するためには、意見を異にする人々の間での対話、自然と人間の共存が本当に必要になっています。地域社会の変質(おそらく崩壊)も他人事ではありません。日本でも遅ればせながら2000年

表1. 伊藤寿郎による博物館の分類

世代	主な使命	概要
第一世代	保存中心	館側が「宝物を見せてあげる」、来館者は「拝観」という関係
第二世代	公開中心	様々な資料が収集、調査・研究の対象に
第三世代	参加中心	地域指向型の博物館。市民参加が継続的に利用することがポイント
第四世代	模索中	

代以降「市民とともに作る新時代博物館」が謳われ始めました（「対話と連帯の博物館」文科省諮問委員会）しかしこの動きはその後着実に、計画的に実現されているのでしょうか？ミュージアムの充実も含めた文化政策に対して、（学芸員などの人件費も含め）長期的で十分な予算をつけるようになっていくのでしょうか？

その意味で、だて歴史文化ミュージアムには期待しています。伊達市にはほんとうに豊かな地域の歴史があると思います。この素晴らしい地域の歴史や文化や自然を市民と共有して次世代に確実に継承するためには、オリジナルの資料を収蔵し、資料をよく調査・研究するとともに、常設の展示施設・設備をもち、計画的に調査・研究の成果をわかりやすく公開することが必要です。さらに展示を通して、市民が「自ら学ぶ」機会を提供することが大切です。そのためには、学芸員という専門職員が、この調査・研究・保存・公開（＝生涯学習の実現）というすべての過程に責任をもって関わるようにしなければなりません。次代を担う、すぐれた学芸員を計画的に養成することこそが、市の文化度を高め、郷土に誇りを持つ市民を将来にわたって育てることにつながります。だて歴史文化ミュージアムには、第4世代の博物館になっていただきたいと切望しています。

最後に、伊藤寿郎さんの言葉をご紹介します。「博物館というものは、市民が学習し、あるいは創造してきた成果が、地域の博物館のなかに蓄積され、それがさらに他の多くの人々に活用されていくという、長期の展望を持った施設です。だからこそ、公費によって維持・運営されなければならないものですし、また、同時に市民自身の主体的な取り組みと力量が求められてくるわけです。」（『市民のなかの博物館』p132）

伊藤寿郎（1947年－1991年）東京学芸大学助教授、専門は博物館学。

博物館を「市民交流の場」として変革を唱えた先駆者。死の直前まで口述筆記させて原稿を書き続けた。1991年胃がんにより死去、44歳。



国立歴史民俗博物館



〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

開館時間

3月～9月 9:30～17:00
10月～2月 9:30～16:30

入館料

一般 420円
高校・大学生 250円
小学・中学生 無料

博物館の一般的な内容については下記のハローダイヤルへお電話ください。

受付電話: 03-5777-8600
(午前8時から午後10時まで)

だて歴史文化ミュージアム

2019年4月3日(水)オープン!!



伊達成実所用具足



菊蒔絵台付きオルゴール



有珠善光寺所有の衣服 (ルウンベ)

北海道伊達市には縄文文化やアイヌ文化、仙台藩巨理伊達家中の移住がもたらした武家文化まで、さまざまな文化が生まれ、輝いた歴史があります。そして、どの時代も北方や南方の人々との交流があり、つねに異文化との接触がなされてきた街です。

だて歴史文化ミュージアムは、だれもが「伊達市の生い立ち」を知ることができるとともに、文化の多様性の意義や多文化共生社会へ向けた取り組みについて、世代や立場の違いを超えて考えることができる博物館を目指しています。



有珠モシリ遺跡出土の銚先
【続縄文期】

だて歴史文化ミュージアム 北海道伊達市梅本町 57-1

【道の駅「だて歴史の杜」、レストラン牧家・びっくりドンキー隣り】
札幌から高速道路で約2時間。JR特急列車で約1時間50分。
藍染め体験等ができる体験学習館を併設しています。



講演要旨 【教育】

平成30年1月10日に、だて歴史の杜カルチャーセンターで開催したアイヌ文化講座の内容を紹介します。この講座は胆振教育研究所(安宅錦也所長)が主催し、伊達市噴火湾文化研究所が協力したものです。参加対象は胆振管内の小・中学校の教諭で、目的は公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が刊行した副読本『アイヌ文化：歴史と現在』を用いて、児童・生徒がアイヌ文化を理解するための指導方法を学ぶことです。

〈講演〉

「学校教育における『アイヌの学習』の伝え方」

小樽市立高島小学校・教諭 平山 裕人



学校教育で、どのように「アイヌの学習」を教えるべきか。

特にここ胆振地区ではどうしていけば良いのか。副読本『アイヌ民族：歴史と現在』(小・中学校版)を使いながら、説明していきます。

さて、胆振という言葉はいつからあるのかご存知でしょうか。

658～660年に阿倍比羅夫という将軍が、北は(おそらく)今の北海道までを航海して蝦夷^{えみし}の地に遠征し、肅慎^{みしはせ}と交戦をしたという事件があり、その際に、胆振鉏^{いぶりさえ}という地名がでできます。今の胆振とは異なると思いますが、もともとなった地名です。その後、松浦武四郎が「北海道」と名づけた際、同時に『日本書紀』に出てくる「胆振国」や「後志国」から地域名としました。胆振地区は、室蘭・登別・白老などアイヌ語地名が多く残っており、アイヌ民族が先住していた証拠にもなります。そして、現在も胆振・日高地方には多くのアイヌの人たちが住んでいるのです。

アイヌ民族：歴史と現在 —未来を共に生きるために—副読本 【小学校版】

1. アイヌ民族の文化について

①アイヌ語の地名について

アイヌ語は、日本語の形とはかなり異なり、難しいですが、地名を見分けるのは意外と簡単です。北海道にある市町村などの地名には、「別」や「内」や「幌」が付く地名が多くあります。

それらはアイヌ語の「ペツ」や「ナイ」や「ポロ」がもともとなったもので、それぞれ「川」「沢」「大きい」という意味があります。全アイヌ語地名に占める割合と現在残っている地名を列挙すれば、

「内」がつく地名が約23%・・・岩内・黒松内・稚内など(ナイ=小さい川、沢)

「別」がつく地名が約11%・・・登別・喜茂別・芦別など(ペツ=大きい川)

「幌」が付く地名が約4%・・・札幌・士幌・美幌など(ポロ=大きい)

シリ・・・崖・島 コタン・・・村 となります。

これらは地図帳からアイヌ語地名を探すことができ、また、アイヌ語地名が多く残っている北海道から、千島列島やサハリン、東北地方の地名からの広い範囲でもアイヌ民族が先住していたことを知ることも出来ます。

②衣食住について

アイヌの人たちの衣服は、身近にある材料を使い衣服を作っていました。動物の毛皮やオヒョウの木の繊維で織ったものや、羽のついた鳥の皮で作った毛皮などがあります。また、「蝦夷錦^{えぞにしき}」と呼ばれる絹^{じんばおり}でおられた衣服は中国との交易で手に入れ、「陣羽織」



や木綿衣(ルウンペなど)は和人と交易で手にいれたものです。

食事は、1日に朝・夕の2回です。主に、ご飯と汁物で、汁物が中心となります。家庭科の授業の中で、チェブオハウ(サケの切り身の汁)は、アイヌ文化を教えながら簡単に作ることができます。

アイヌの言葉で、「コタン」は村のことを言い、災害に遭いにくい場所に村を作り暮らししました。家のことを「チセ」と言い、白老の博物館や昭和山山に行くことができます。「チセ」には窓が2～3箇所あり、「神様が出入りする窓」は人間が通れない、覗き見る事も許されない場所でした。主人や家族、お客様が座ったりする場所、宝物を置く場所なども決められていました。地域によって神様が出入りする窓の方角は異なります。

③信仰について

人間が動物を捕らえて、肉や毛皮を手に入れることは、その動物の命を奪うことですが、アイヌの人たちは、それを受け取るかわりに、最高の礼を尽くして「カムイ(神)」を神々の世界に送り帰すことで、再びそのカムイが動物に姿を変えて人間の世界にやってくると考えたのです。カムイを神々の世界へ送り帰す儀式の中で大きいのが「イヨマンテ」です。「イヨマンテ」とは、クマやシマフクロウの霊送りの儀礼のことです。

④歌や踊り、楽器について

歌は、同じ歌でも地域や歌う人によってメロディーや歌詞が異なります。アイヌの歌は楽譜で表すことが

難しかったのですが、教材として残すため、5線譜にして友人に作ってもらいました。

踊りは、お客に見せるのではなく、神様に見せるものなので内側に向かって踊ります。

楽器は、代表的なものとして「ムックリ」があります。舌の動きや呼吸の仕方を変え、紐を引いて弁を振動させ音を出します。

⑤文芸について

カムイユカラ(神々の物語)では、アイヌの女性・知里幸恵の書いたアイヌ神話の採録と翻訳をまとめた『アイヌ神謡集』(1923年)が有名です。

2. アイヌ民族の歴史について

白老町のアイヌ民族博物館のような文化に特化した施設を見ると、よく出る質問があります。

①アイヌの人たちは、日本語を話せますか。

②アイヌの人たちは、今も、サケやシカをとって生活しているのですか。

これは、けしてふざけた気持ちから出た質問ではありません。あまりにも「今のアイヌ民族」のことを知らないことから出た質問です。この質問は、和人に「今も、チョンマゲの頭で、刀を差して生活していますか」と聞くようなものです。

なぜ、アイヌの人たちがアイヌ語ではなく日本語を話すのか。なぜ、サケやシカをとる生活をやめたのか。

なぜ、今、アイヌ語やアイヌ文化を守り、広げようとしているのか。アイヌの歴史をとおして、学んで欲しいと思います。以下に、子どもたちに歴史を教える際のポイントを挙げておきます。

①縄文文化からアイヌ文化へ

北海道では、今から1万年あまり前から2千3百年ほど前までを縄文時代、1500年ほど前から800年ほど前を擦文時代、800年ほど前から百数十年前までをアイヌ文化の時代と言います。

縄文時代の人たちは、石器や骨で作った道具を使い、海や陸の動物を獲りました。食べ物は土器に入れました。

擦文時代の人たちは、和人から鉄を手に入れ、石器を使わなくなりました。アイヌ文化の時代は、石器も



土器も使わなくなり、同じ狩りや猟といっても時代の流れを見ることが出来ます。

15世紀から18世紀にかけて、和人とアイヌ民族の大きな戦いが三度あり、和人がアイヌの大地に侵攻していきました。

②北海道の開拓とアイヌ民族

1869年に日本政府は、蝦夷地を北海道と改め、一方的に日本の一部にしました。政府は、アイヌ民族の言語や生活習慣を禁じ、日本語の名前に変えました。また、生活の場を奪われ、サケ漁やシカ猟も禁じられました。アイヌの人たちには、餓死者さえ現れました。

③北海道旧土人保護法

1886年の北海道土地払下げ規則は、和人1人に

10万坪まで無償で与えて開墾しました。その後に、残った未開墾地をアイヌ民族の1戸に対して1万5千坪まで、農地利用に限って「下付」する(1899年)という差別法が、北海道旧土人保護法です。

④先住民族の権利として

アイヌ民族がもっていた土地や資源の復興や、民族として政治の場面で意見をいったり、民族の進むべき道を自分たちで決める(民族自決)などの権利で、これらの権利は未だ獲得していません。

一方、文化に関してのみ、アイヌ文化振興法で定められており(1997年)、現在、2020年に先住権の獲得を柱とするアイヌ新法の制定を目指し、議論されています。

アイヌ民族：歴史と現在 —未来を共に生きるために— 副読本【中学校版】

中学校版は、歴史が中心となり、世界的な視野でアイヌ史を学んでいきます。

アイヌ史は南の日本や、北の中国の歴代王朝と関係し、幕末には南下して来たロシアとの関わりもあります。

つまり、アイヌ独自の歴史とともに、ヨーロッパ史・東洋史・日本史との関係から見ることも大切です。

1. 前近代

①北海道の旧石器時代

当時の北海道は、サハリンと陸続きであり、そのサハリンも大陸とつながっていました。このころの文化

を旧石器時代といい、北海道の旧石器時代の特徴のひとつに、細石刃という小さな石器が北東アジアから伝わってきました。

②商人とアイヌの人たちとの交易

いわゆる『文明』社会との接触は、日本とは古代国家、封建領主、中国とは、元・明・清王朝、17世紀末以降はロシアと接触しました。

そして、18世紀にはいると、漁場で和商人はアイヌの人たちからニシンやサケを買い集めました。

さらに本州において、藍や綿花などの商品作物の栽



アイヌ民族の儀式に使う道具



善光寺宝物館でのアイヌ文化の展示

培が盛んになったことにより、肥料としてニシンの需要が高まったことや、長崎貿易において海産物（ナマコをゆでて干したもの・干シアワビ・コンブ）の輸出が増えたことから、アイヌの人たちを漁場労働者として働かせ、過酷な労働を強いました。

2. 近代・現代の政治と社会

①アイヌ民族の日本への統合と北海道の開拓

「北海道土地売貸規則」「地所規則」とは、「開拓」のため和人にひとり10万坪まで土地を与えるという法律です。その後、「北海道地券発行条例」の導入により、アイヌの人たちが住んでいた土地を官有地にし、あちこちに移住させました。

②大正デモクラシーから戦時体制へ、

大正デモクラシーの風潮のなか、「部落」差別に苦しんだ人たちは生活の改善を求める社会運動を活発に行いました。アイヌ民族も、差別に対する批判、生活習慣への偏見や批判のなか、自立していく道を探るため「北海道アイヌ協会」（1931年）を設立しました。

③国内の政治の動き

—「アイヌ文化振興法」の制定まで—

戦後、「北海道アイヌ協会」が再建されましたが、アイヌ民族と和人の経済格差が縮まらなかったため、「北海道ウタリ協会対策」として北海道が独自で事業を開始しました。この事業は、アイヌの人たちが住んでいる港や道路の整備をするための公共事業費として予算

化されたもので、北海道外に住んでいるアイヌの人たちへの恩恵は全くありませんでした。

「アイヌ民族の学習」の実情

現在、小中学校の授業で、アイヌの文化・歴史を学んでいる学校はいくつかあります。

その中のひとつに千歳市の末広小学校があります。この小学校には、アイヌの伝統的なチセ（家）を再現した教室があり、全学年の教育課程にアイヌ文化学習を導入し体験学習を通し学んでいます。

また、平取町の小学校では、1990年代に1人の先生がアイヌ文化の授業を取り上げました。しかし、「この先生がアイヌに詳しいから出来る授業だ」との意見があったため、誰でもアイヌ文化の授業が出来る教材づくりを、約10年かけてつくりました。現在は小学校から中学校まで、社会科の授業だけでなく家庭科・図工などの授業でも学んでいます。

新ひだか町では、シャクシャイン（松前藩との戦いのリーダーとなったアイヌの首長）の出身地であるため、たくさんの資料や教材になるものがあり、「シャクシャインの戦い」に関する授業を行っています。

現在、小学校低学年では、アイヌ模様のテキストや絵本を使ったり、図工や歌などでアイヌ文化に親しみ、3・4年生では郷土の歴史を学ぶ中で、北海道の歴史と交え、高学年では日本史、中学校では世界史も含めた歴史の授業の中で、アイヌの文化と歴史を学ぶことができます。さらに言えば将来、独立した「アイヌ学」としての学びが確立していくことを求めます。



研究ノート
【考古】

噴火で埋まった作物を特定せよ!

一大根の放置実験からわかること一

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 青野 友哉

■340年前の畑跡の発見

北海道で初めて17世紀の畑の跡を発見したのは、考古学者の峰山巖氏でした。峰山氏は1965年に洞爺湖町高砂貝塚を発掘調査した際に、1663年に降り積もった火山灰の下面が波打った形だったことから、300年以上前の畑の跡だと気が付きました。しかし、この重要な指摘はその後あまり注目されず30年が過ぎました。

1990年代になると七飯町や千歳市、別海町などの道内各地で17・18世紀の畑跡が見つかり始め、アイヌ民族の畑か和人の畑かとの議論が巻き起こりました。

伊達市内では、ポンマ遺跡、有珠4遺跡、カムイタプコブ下遺跡、ポンマ遺跡、オヤコツ遺跡で発見されており、17世紀の畑跡は有珠地区の広範囲に分布していることがわかります。



有珠4遺跡の畑跡

■誰の畑か?

噴火湾地域で見つかる畑跡の耕作者は誰でしょうか。17世紀前半の有珠地区は有珠会所と有珠善光寺が存在したことから、アイヌ民族以外にも少数の和人が住んでいました。つまり、耕作者はアイヌ民族と和人の双方が考えられます。

近年、17世紀前半のポンマ遺跡とカムイタプコブ下遺跡から、アイヌ民族の特徴を示す貝塚や住居跡(チセ)、墓趾とともに、同時期の畑跡が見つかっており、アイヌ民族が畑を作っていたことは疑いがありません。これまでアイヌ民族は「粗放的な農業」しか行わなかったとされてきましたが、それは幕末の姿であり、それ以前は立派な畝を持つ畑を作っていたことがわかりました。

ちなみに、寛政年間(1789~1801年)の有珠会所を記した図面(函館図書館蔵 渡辺1972)には「畑」の文字があり、松浦武二郎の『東蝦夷日誌』の有珠湾風景には柵と畝の表現が見られます(渡辺

1972)ので、和人の畑もあったと思われます。さらに、松前旧事記には「土地肥沃にして菜蔬よく出来」と有珠について記しています(渡辺1972)。ただし、これらは18世紀のことであり、17世紀以前の畑に関する文献記録はないのです。

■何を栽培したのか?

では、畑で何を作っていたのでしょうか。19世紀の和人地(渡島半島の南端)ではヒエやタバコなどが栽培されたとの記録があります(林善茂1969)が、17世紀についてはわかりません。

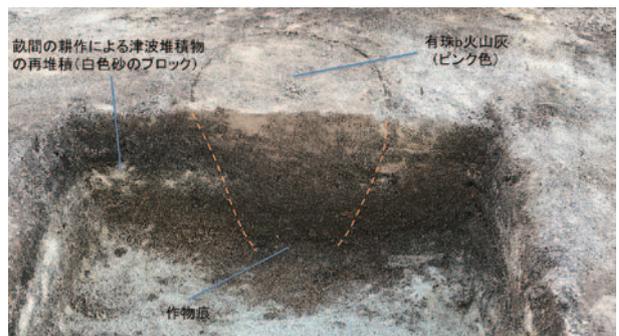
遺跡の発掘調査では、畑跡の土を洗って、炭化した穀物の種子を探す方法もありますが、仮に穀物が見つかってその土地で栽培されたものか、交易でもたらされたものかの区別はつきません。また、穀物以外の野菜などであった場合は腐って残らないことがほとんどです。

そこで私は1640年の駒ヶ岳噴火による津波堆積物と、1663年の有珠山噴火による火山灰を鍵にして、畑跡中の作物の痕跡を見つけようと試みました。

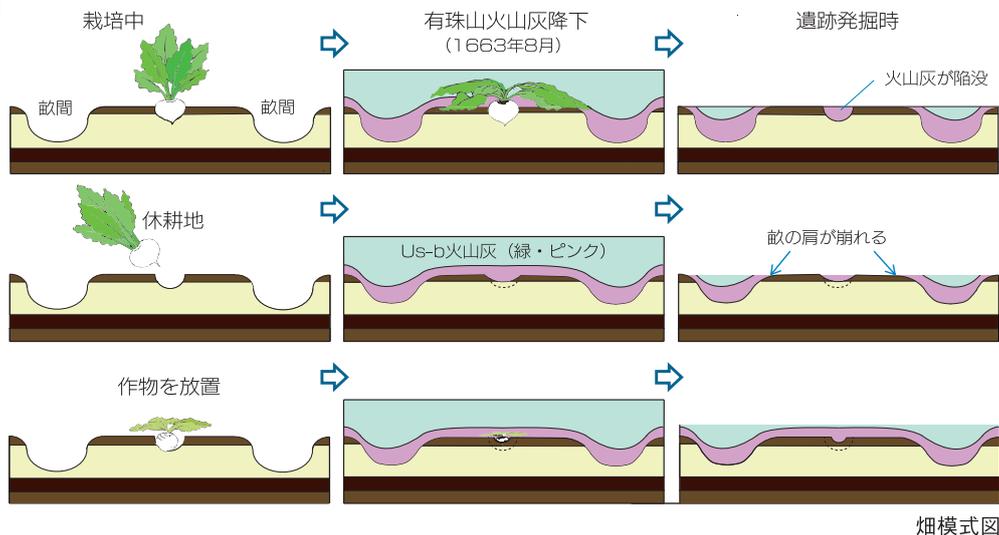
作物の痕跡を確認できる条件は、①1663年の有珠山噴火時に作物が植えられていた畑か、放棄されて間もない畑であること、②畝の下に駒ヶ岳噴火の津波堆積物が存在していることの2点が重要です。



作物痕の調査



作物痕の断面



畑模式図

■これが作物の痕だ！

カムイタブコブ下遺跡では、1640年～1663年に作られた3本の畝跡が見つかりました。畝と畝の距離は約1mと広く、畝の高さは約20cmと高い特徴があります。畝の肩が比較的張った形状を呈しており、1663年の有珠山噴火直前まで使用されていた畝である可能性が高いのです。

作物痕跡の見つけ方は、畝上に堆積した有珠山の火山灰(1663年降下)を除去し、畝上を徐々に平面的に掘り下げます。すると、黒褐色の砂の上面で火山灰や黒色の砂が丸く落ち込む部分(直径5～10cm)が20か所で確認されました。

新たな知見としては、3本の畝のうち中央の畝では、作物痕跡が「千鳥」状に2列並ぶ傾向がありました。これは幅の広い畝上に互い違いに作物を植えることで日当たりを配慮していたことがわかります(野本和夫氏の御教示による)。また、作物痕跡の断面形は先端が尖ったものとやや丸みを帯びたものがあり、深さはいずれも10cm前後と浅いのも特徴です。

これらのことから、この畑の栽培作物は蕪や大根といった根菜類である可能性が高いと考えています。なお、作物痕跡については残存デンプン粒分析を実施するため、土壌サンプルを採取しています。

■大根の放置実験

火山灰や黒色の砂の丸い落ち込みが本当に作物の痕なのかを確かめるために、現代の畑で根菜類を放置する実験を行いました。



大根の放置実験

場所:北海道伊達市北黄金町

期間:2013年11月22日～

2017年10月10日(発掘実施日)

方法:栽培された大根の両脇に金属製ピンポールを差して目印とし、大根の腐朽過程と穴の埋没過程を写真で記録した。

発掘:約4年を経過した畑で、かつて大根が存在した部分を掘り下げて断面の観察と残存デンプン粒分析用の土壌を採取した。

結果:畑に放置した大根は腐朽とともに収縮し、空洞になる。このことは、火山灰で覆われた場合には、作物部分の下部にまで火山灰が入り込むことを示している。また、腐朽後の窪みは1年6か月以上経っても完全には埋まりきらないことから、休耕後に火山灰が降下した場合も若干の窪みとして観察される可能性がある。

実験の結果からは、北海道のような寒冷地では根菜類は腐りにくく、また土壌の発達が遅いために埋まりにくいことがわかりました。つまり、作物を収穫した後の窪みは1年半以上も埋まりきらずにいるわけです。このことから、遺跡で見つかる火山灰の落ち込みは作物が植っていた箇所だといえそうです。

また、有珠山は1663年8月16日(旧暦7月14日)に噴火したため、畑に作物が植った状態で火山灰が降ったとしたら、作物が腐ってその部分に火山灰が入り込むことでしょう。この場合はより明確に作物の形を地中に残すことになります。

まとめ

遺跡の畝上で見つかる円形の火山灰の落ち込みは、根菜類の作物痕跡であると考えられます。ただし、休耕地の場合は収穫後から火山灰の降下までの年数により、その断面形状に違いが出ることでしょう。

今後は、噴火直前まで作物が生育していた畑を見つけ出し、その作物の形状から種類を明らかにすることが目標です。

【参考文献】 渡辺 茂,1972『新稿 伊達町史』三一書房。
林 善茂,1969『アイヌの農耕文化』慶友社。



発掘速報
【考古】

有珠で発見されたチセ(住居)跡の特徴

— 小氷期を生きたアイヌ民族の住居を考える —



北海道博物館・学芸員 小林 孝二

博士(工学)。一級建築士。専門は建築史

■はじめに

2011年、伊達市有珠のカムイタブコブ下遺跡で、噴火湾沿岸では初めて、アイヌ文化期の住居(チセ)跡が発見されました。翌年にはポンマ遺跡でも発見されました。本稿では、これらの平地住居について、千歳・恵庭・平取などの先行発掘事例と比較しその特徴にふれつつ、室内環境についても考えてみます。

■先行発掘事例の特徴

まず、先行発掘事例の基本情報を見てみます。(以下、発掘住居跡60数例の平均値で示します)。

- 面積(総面積): 32.6㎡(内、セムのあるもの。以下複室形と表記): 36.2㎡。セムのないもの。以下単室形と表記): 30.4㎡。
- 主室の柱穴太さ: 11.9cm(内、複室形: 11.6cm。単室形: 12.1cm)。
- 主室の柱穴深さ: 37.4cm(内、複室形: 40.3cm。単室形: 35.4cm)。

- 複室形のセム: 柱穴太さ: 9.3cm。深さ: 25.9cm。
- 柱は数例の判別困難なものを除き全て打込で建立。
- 面積で見ると、複室形は、総面積は広いが、主室単独で見ると単室形が広い。細かく見ると、10㎡(畳6枚強)のものから70㎡(畳43枚強)を超えるものまで面積は多様で、中でも20㎡前後と50㎡前後のものが2つのピークを形成している。
- 柱穴は、単室形が複室形に比べて柱は太いが、打込は浅いこと。複室形のセムの柱穴は主室に比べて細く浅いこと。

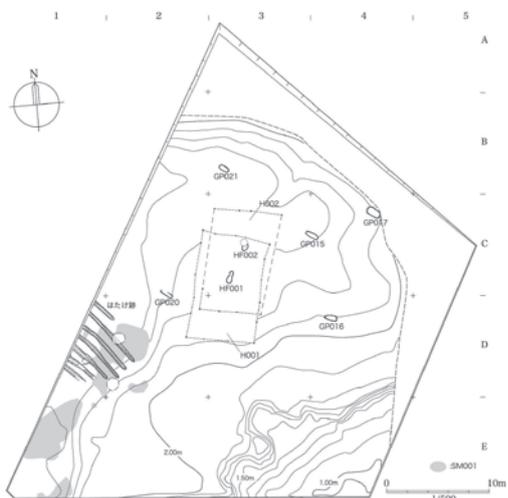
以上がこれまで分かってきたことです。

■先行発掘事例から見た有珠チセの特徴

有珠ではポンマ遺跡で2例(1号住居跡・2号住居跡)、カムイタブコブ下遺跡で1例(1号住居跡)が発見されました。有珠地域で最初であり海岸部のチセ跡としても貴重な発見です。基本情報は次のとおりです。

- ポンマ遺跡

1号住居跡: 面積: 約65㎡(短辺約6.7m・長辺約



1663年有珠山火山灰下の遺構配置(ポンマ遺跡) 点線が1号住居跡と2号住居



ポンマ遺跡のチセ跡(1号住居跡)



カムイタプコブ下遺跡で検出された柱穴（中央の黒い部分。写真手前の四角い穴は土層断面を見るために掘ったもの。）

9.8m)。柱穴(平均): 直径9.6cm。深さ32.1cm。柱は打込。

2号住居跡:面積:約63㎡(短辺約6.3m・長辺約10m)。柱穴(平均):直径9.8cm。深さ40.1cm。柱は打込。

・カムイタプコブ下遺跡

1号住居跡:面積:約47㎡(短辺約5.7m・長辺約8.2m)。柱穴(平均):直径9.3cm。深さ27.2cm。柱は打込。

ポンマ遺跡は1号住居跡・2号住居跡共にほぼ同一のプロポーシオンと面積ですが、2号住居跡の柱穴が確認できたのは、ほぼ両側の短辺に限られ、現時点でその特徴や復元を行うには資料不足といわざるを得ません。

1号住居跡を先行事例と比較すると、①単室形、②面積が大規模な事例に近い、③柱穴が細く打込深さがやや浅い、④柱の間隔が広い(先行事例では1.5m前後が多いが2mを超える事例が多い)。

カムイタプコブ下遺跡1号住居跡と先行事例とを比較すると、①単室形、②面積は先行事例で比較的多い50㎡前後の事例に近い、③柱穴が細く打込深さがやや浅い、④柱の間隔が不規則で広い(最大の間隔約4.5m)。

■有珠チセの想定復元

前記した資料の制約から、ポンマ遺跡1号住居跡(以下、ポンマ-1と表記)とカムイタプコブ下1号住居跡(以下、カムイ-1と表記)について想定復元を試み、その模型も作成して、特徴と課題を検討してみました。

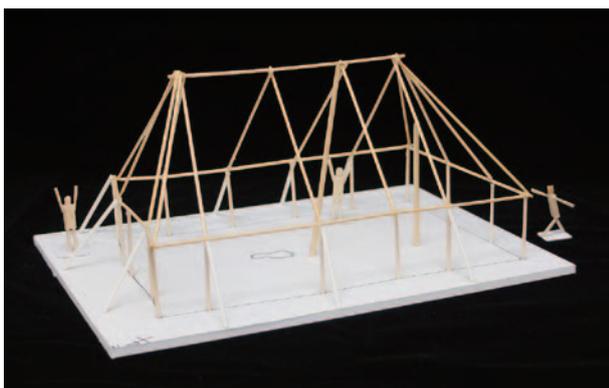
建築物が成立するためには、建築材料自体の重さ(自重)、屋根にかかる力(雪、雨、台風など:垂直荷重)、水平方向にかかる力(台風、地震等:水平荷重)の3つに耐えなければなりません。

先述した様にポンマ-1・カムイ-1は共に先行事例と比べても大きな住居に分類される一方で、柱穴は細くてやや浅く、柱の間隔も広いなど構造は脆弱で、建築物として成立していたのであれば、この状態だけでは甚だ不安といわざるを得ません。

はじめに、ポンマ-1では屋根勾配を復元チセでも一般的な約45°とした上で、建物の幅が広く屋根が大きくなることから、その重さを支える目的で室内に「つかえ棒」を挿入し、地震や台風に耐えるように柱列の外側にも「つかえ棒」を配置しました。

カムイ-1は、ポンマ-1と屋根の形状を比較する目的で、屋根の勾配を若干ゆるく約32°としました。ポンマ-1に比べて若干規模が小さく、建物の幅も狭いことから、屋根を支える「つかえ棒」は設けませんでした。一方で、柱の間隔がポンマ-1以上に不規則で広いことから、柱穴が確認できていない場所にも地表上に柱を建込み、外側に「つかえ棒」を配置しました。

カムイ-1・ポンマ-1で発掘された住居跡に残った情報だけでは読み取れない位置に「補強」を施したのは、残念ながら、発掘情報だけでは組み立て中に崩壊することが想像されたため、あくまでも地表に残さない補強方法を想定したものです。



ポンマ-1の復元模型



カムイ-1の復元模型

以上のような「想定補強」を行ったとしても解決できない大きな弱点が残りました。それは柱の打込深さの不足です。先行発掘事例では、ほぼ40cmの打込深さが確認されていますが、カムイ-1・ポンマ-1では、それぞれ27.2cm・32.1cmにすぎません。先に述べたように、建物は、自重・垂直荷重・水平荷重に耐えなければなりません。復元模型では、なんとか自重・垂直荷重には耐えられる構造を想定しましたが、水平荷重にはあまり耐えられないと考えられます。現在の家形テントのように、ロープを斜めに張り、細い杭や大きな石で押さえたのでしょうか？残念ながら現在までの情報からは分かりません。ここでは有珠のチセの疑問であり特徴として挙げるにとどめておきます。

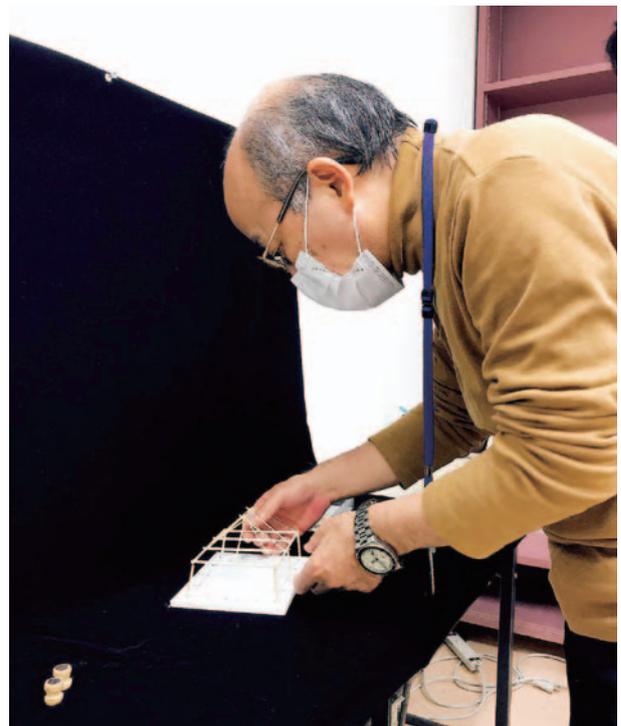
■チセは暖かったのか

ポンマ-1・カムイ-1が建てられた時代は寒冷期だったことは確実です。まさに温暖期から寒冷期へ向かう過程で、防寒的と考えられる竪穴住居が廃れ、アイヌ文化の大きな指標の一つである平地住居へと変化した理由はどう理解すれば良いのでしょうか？答は一つでは無いことは確かですが、本州以南との交易経済の進展がチセの有り様にも大きな影響をあたえた事は確実と考えます。住まいも社会の変化と無縁では無かったのでしょうか。

暖かさの感覚は人それぞれですが主に温度・湿度・気流の組み合わせが重要です。さて、チセは暖かったのでしょうか？発掘跡からは建物の中ほどの地面に設けた炉は確認出来ませんが、それ以外に建物の防寒性を示す資料は見いだせません。チセの防寒性能については、伝承や記録からは「暖かい説」、「寒い説」の両者が見られますが、どちらかに軍配を上げられるほどの情報は得られません。一方、「体験宿泊」や「室内環境測定」(調査系)も行われ、ここでも評価は分かれていますし、それぞれの調査手法が異なり決定的な評価には至っていません。

以上の「説」を踏まえて、私は冬のチセの室内環境を次のように考えています。

- ① チセの外周は柱がまばらに立ち、地表・地中は屋外と連続的で、外部の低温な地表・地中からの冷却作用が室内に強く及び、炉の周辺だけは若干暖められるが、地面の蓄熱効果は限定的で、外壁側の周辺は常時冷却されている。
- ② ヨシや笹などの被覆材料自体には断熱効果は認め



復元した模型の撮影作業

られるが、通気性も高く、冷気の流入も大きい。

- ③ 干し草、笹、莫産などは断熱性が高く、地面に厚く敷くことで、優秀な保温効果を期待できる。

以上のように、チセは、地面に敷く厚い敷物と炉の近くを除いて、残念ながら防寒的な性能は高いとはいえないと考えます。仮にポンマ-1・カムイ-1などのような最寒冷期のチセが復元チセと同様な作り方(骨組み材料の太さを別にして)であったとしたなら相当に厳しい居住条件であったと考えられます。

■有珠チセの想定復元を終えて

有珠で初めて発見されたチセの実測図を見せられた時の正直な感想は複雑なものでした。「大きい」、「柱列の規則性が見えない」、「柱間が広すぎる」、「柱穴が浅い」といった印象が頭の中で駆け巡りました。そうした中で、有珠チセの特徴は？寒冷期に建てられたのにチセは暖かったのか？と質問を投げかけられても、どうにも建物としての有珠チセのイメージが浮かんできませんでした。そこで「ボケた頭」で考えることをやめ「手」を動かしてみることにしました。そこから見てきたのが、本来成立し得ない構造物を成立させるための「裏技(つかえ棒の想定)」です(研究上は「禁じ手」ですね。正解とは限りません)。実際に手を動かすことによって、10年ほど前の先行発掘事例研究の中で「頭」に浮かんで消えていた疑問がよみ

がえてきたのです。

ただし、残念ながら柱穴が浅い理由とその「裏技」については謎が深まるばかりで、今後の課題とします。

昨年のカムイタブコブ下遺跡の発掘調査では、チセの可能性のあるあらたな柱穴が見つかりました。今年の秋にはそこを発掘する計画とのことです。それまでにボケた頭を鍛え直したいと考えています。

※本研究は、日本学術振興会・科研費15H03272「小氷期最寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響」(研究代表者:北海道博物館、添田雄二)の助成を受けて行われました。

■参考文献

小林孝二(2010)アイヌの建築文化再考—近世絵画と発掘跡からみたチセの原像—北海道出版企画センター

伊達市の文化財が紹介された本・雑誌・TV番組・展示

本・雑誌

■巨理伊達家資料

- 仙台市博物館「伊達政宗生誕450年記念 特別展伊達政宗図録」2017年10月【政宗公御軍記 他】
- 碧水社「週刊ビジュアル戦国王」2018年2月【成実文書・成実甲冑・館山チャシ】

■北黄金貝塚

- 青野友哉「北海道噴火湾沿岸における縄文貝塚の貝種組成からみた環境変遷(予察)」『北海道考古学』第53輯, 2017年3月
- 今村啓爾「縄文文化」平成29年10月 ニューサイエンス社【北黄金貝出土の骨刀写真】
- ブラネットライツ「時空旅人」VOL.41 平成29年11月 三栄書房【縄文人の頭蓋骨・男女の顔イラスト・海進イラスト・海退イラスト】
- 北海道総合政策部「北海道新幹線を活用した教育旅行ガイドブック」平成30年2月【北黄金貝塚】

■有珠モシリ遺跡

- 藤尾慎一郎「弥生時代って、どんな時代だったのか?」平成29年3月 朝倉書店【有珠モシリ遺跡】
- TABIZURU FOUNDATION「旅鶴 夏・秋号」平成29年7月
- 東京大学大学院人文社会研究科附属常呂資料陳列館(北海道北見市)「第7回企画展示 動物を祀る—オホーツク文化の動物観—」平成29年8月1日~12月25日
- 大島直行「縄文人はなぜ死者を穴に埋めたのか—墓と子宮の考古学—」2017年9月 国書刊行会【貝輪を付けた人骨】
- 大阪府立弥生文化博物館「海に生きた人びと—漁撈・塩づくり・交流の考古学—」平成29年10月 【貝製品】
- ユーキャン「日本歴史大地図」平成29年11月【北黄金貝塚・有珠モシリ遺跡】

■有珠4遺跡・カムイタブコブ下遺跡・オセコツ遺跡

- 添田雄二ほか「小氷期最寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響II」『北海道博物館研究紀要』第2号, 2017年3月
- 青野友哉「社会復元のための人骨・遺物による埋葬環境判別法—17世紀のウスコタンにおける墓と社会—」安斎正人編『理論考古学の実践』理論篇, 2017年6月, 同成社

- 田村朋美ほか「北海道伊達市有珠オヤコツ遺跡出土玉類の材質に関する再検討」『函館工業高等専門学校紀要』第52号, 2018年1月
- 浜島書店「新詳日本史」平成30年2月【南海産の貝輪とイモガイ・クマ彫刻のスプーン】
- 相原淳一「縄文から続縄文・弥生への移行期における葬送と社会」『別冊季刊考古学』27号 平成30年3月 雄山閣【有珠モシリ遺跡】

TV番組・展示

- 北海道立文書館 企画展「開拓使時代の北海道を生きた人びと」2017年7月25日~8月24日【伊達邦成】
- 日本テレビ「超門O×クイズ 真実か?ウソか?」2017年11月24日放送【成実公甲冑】
- NHK総合「歴史秘話ヒストリア 北の大地に夢をひらけ! お殿さまの北海道開拓史」2017年12月8日放送【伊達市の歴史・文化財】
- 北海道テレビ放送「HTB開局50周年 イチオシ!スペシャルへえ! ほお~150年 あなたと選ぶ重大ニュース」2018年3月6日放送【伊達市の歴史・文化財】

Newsletter【噴火湾文化】第12号

- 編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所
〒052-0031 伊達市館山町21番地5
TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445
E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp
URL <http://www.city.date.hokkaido.jp/funkawan/>

- 印刷 (有) 共立印刷
〒052-0022 伊達市梅本町4番地4
TEL. 0142-23-2175 FAX. 0142-25-1971

2018年3月31日発行